

# 松がつなぐ明日

四方を海に囲まれた日本の海岸線は大変に長い。

黒松の海岸林が延々と連なって形づくられる景観は日本に固有のものであろう。防風、防砂、防潮のために祖先から今日にまで継承されてきた人工の林である。東日本大震災は東北地方の海岸林を壊滅させてしまった。

被災規模からしてその復興は当然のように公共事業として位置づけられたものの、ここに一つのNGOが割って入り、一地域の海岸林再生に打って出た。オイスカと通称される開発協力団体である。仙台平野に位置する宮城県名取市の海岸部がその舞台であった。約一〇〇ヘクタールに五〇万本からなる黒松林を十年かけて造成、必要な人材は被災地住民、資金一〇億円はこれをすべて民間からの寄付金によってまかなうというベンチャー・プロジェクトである。

被災十年を経てプロジェクトはほぼ完成にいたった。プロジェクトの生成から完成までのヒューマン・ドキュメントが、日経新聞元論説委員の小林省

渡辺利夫 わたべ としお（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任。二〇一〇年十一月退任。二〇一七年六月より現職。

太氏の手によって『松がつなぐあした―震災10年

海岸林再生の記録』（愛育出版）として上梓された。

発災が三月十一日、オイスカはその一週間後に海岸林再生への協力を表明。一カ月後にヘリコプターで被災海岸林を視察、調査報告書を作成、報告会を全国各地で開いて市民の協力を求めた。

途上国協役に長く豊かな実績をもつオイスカへの信頼があつてのことだが、行政は一大プロジェクトをこのNGOに一任した。プロジェクトのポイントには、被災地住民の雇用をとまなう黒松の育苗、苗木の植栽・育林であった。住民の協力を引き出すためのオイスカ・スタッフの限らない努力が同書でつづられる。この事業に対する企業の協力にもみるべきものがあつた。かねて唱えられていたのがCSR（企業の社会的責任）であつたが、震災復興にその援用の場を初めて見出したかのごとくであった。一つのNGOであっても、志と情熱をもってことに当たればこれだけの成果を達成しうる。オイスカの実験はこのことを訴えている。